

(7) えんどう (えんどうまめ、さやえんどう及び実えんどう)

(ア) 病害

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
<p>&lt;さやえんどう 及び実えんどう&gt; うどんこ病</p>	<p>薬剤防除 発病初期の防除が重要である。</p> <p>1. 茎葉散布 ****特別栽培農産物表示ガイドラインで規定されている「節減対象農薬」以外の農薬を使用した減化学農薬防除体系**** (さやえんどう、露地5～8月まき) 初発前～初発5日以内から下記の農薬で茎葉散布を開始し、栽培終了1週間前まで1週間間隔で薬剤散布を行う(平成23年普及奨励並びに指導参考事項70ページ参照)。 農薬種類名：水和硫黄剤F、炭酸水素ナトリウム水溶剤、炭酸水素ナトリウム・銅水和剤、脂肪酸グリセリド乳剤 ※ さやえんどうのうどんこ病は下位葉や茎の地際部分付近に初発しやすいため、初発の確認に当たっては、この部分を中心に観察する。</p>

(イ) 害虫

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
<p>&lt;さやえんどう&gt; ヒラズハナアザミウマ (白ぶくれ症)</p>	<p>物理的防除 1. 施設栽培では紫外線カットフィルムが有効であるが、多発条件下では、化学的防除の併用が必要である。 2. 露地栽培ではシルバーマルチフィルムの被害低減効果は認められるものの、単独では実用上の効果は期待できない。 被害発生時期と多発期の予測目安 1. 被害発生時期は7月中旬～8月中旬である。 2. 青色粘着板で多発の目安をつけることができる。 (1) 設置位置は地上30cm～120cmとする。 (2) 半旬合計誘引雌成虫数が5～8頭/100cm<sup>2</sup>以上になると多被害(被害莢率20～30%以上)となる可能性が高い。 薬剤防除</p>

病害虫名及び防除時期	防除方法及び注意事項
<えんどうまめ、さやえんどう及び実えんどう> ナモグリバエ	<p>1. 茎葉散布</p> <p>耕種的防除</p> <p>1. 道南地域では、被害葉中の蛹が積雪下で越冬し翌年春の発生源となるため、初夏まき作型の遅い作期では収穫終了後に残さ等を処分する。</p> <p>薬剤防除</p> <p>1. 茎葉散布</p> <p>さやえんどうでは収穫期間中、果実のがくに幼虫被害が発生しないよう管理する。</p> <p>****さやえんどうでのナモグリバエの発生対応型防除****</p> <p>(1) 出芽後本葉1～2葉期又は苗定植後にジノテフラン粒剤の株元散布処理を行う。</p> <p>(2) 開花始から1週間毎に、ほ場内3カ所程度、各々1畦10mの範囲について株の主茎を調査し、上位3葉あたりの成虫痕数15～20個以上の茎が20茎に1茎以上ある場合、効果の高い薬剤を用いて収穫期間の茎葉散布を行う。</p>
<えんどうまめ及びさやえんどう> ヨトウガ 6月下旬～及び8月中旬～	<p>薬剤防除</p> <p>1. 茎葉散布</p> <p>発生予察情報に注意するとともに早期発見に努め、被害が大きくならないうちに防除する。</p> <p>第1回発生：6月下旬～7月中旬、 第2回発生：8月中旬～9月中旬</p>

(ウ) クリーン農業技術（病害虫防除関係分）（さやえんどう）

○化学的防除の効率化

- ・ナモグリバエ対策として、生育期のジノテフラン粒剤株元処理と収穫期間の発生対応（成虫食痕をみる）による有効薬剤の茎葉散布の体系により、茎葉散布回数を減らす。

○発生モニタリングによる効率的防除

- ・アザミウマ類対策として、粘着トラップを用いた発生増加の把握による薬剤防除開始時期の決定
- ・ナモグリバエ対策として、さやえんどうの新梢の上位3葉の成虫食痕をみることにより、茎葉散布時期を決定
- ・J A S有機適合資材である水和硫黄剤(×500)、炭酸水素ナトリウム・銅水和剤(×750)、脂肪酸グリセリド乳剤(×600)、炭酸水素ナトリウム水溶剤(×800)、バチルス・ズブチリス水和剤(×500)をうどんこ病初発前～初発後5日以内から栽培終了まで1週間間隔で散布することで、化学合成殺菌剤を使用せずに、うどんこ病を防除できる。

○耕種的防除

- ・うどんこ病抑制対策として、たい肥の施用、株間・畝間を広げることによる草勢の維持
- ・病害虫の発生源となるほ場周辺の雑草や作物残さ除去の徹底

※注釈

●土壌診断による施肥の適正化

生土培養窒素又は熱水抽出性窒素の分析を行い(3年以内)、窒素肥沃度に応じた施肥を行う。

●ナモグリバエ対策として、産卵初発の確認による薬剤防除開始時期の決定

簡易にナモグリバエの成虫の発生を捉える方法として、さやえんどうの新梢の上位1～3位葉に付く新しい成虫食痕(直径1mm程度の白色の斑点)を調べ、多数の成虫食痕(15～20個以上/上位3葉)がみられる茎が主茎20茎当たり1茎以上ある場合、果実のがくで幼虫被害が出る可能性があるため、これを防除の目安とする。